



プレスリリース

平成 2 5 年 5 月 2 9 日
独立行政法人国立科学博物館

イタチの人為的移入によってウグイスの生態が変化する

今回の研究成果のポイント

- ・伊豆諸島三宅島で、人がイタチを持ちこんだことによって、ウグイスの巣の高さが大幅に高くなることを明らかにした。
- ・これはイタチによる卵・雛の捕食を避けるためと考えられる。
- ・高い巣はカラスなどの捕食者に襲われやすく、イタチの移入は鳥の生態や島の生態系に予想以上の影響を与える可能性がある。

論文タイトル：Effect of introduced Japanese weasels (*Mustela itatsi*) on the nest height of Japanese Bush-Warblers (*Cettia diphone*) on Miyake-jima Island, Japan
(日本の三宅島における移入イタチがウグイスの巣高に与える影響)

公表雑誌： Wilson Journal of Ornithology
(ウィルソン ジャーナル オブ オーニソロジー) [鳥類学の国際誌<米国>]

公表日時：日本時間 2013 年 6 月 1 日（土）午後 2 時 1 分（1 4 時 1 分）
米国時間 2013 年 6 月 1 日（土）午前 0 時 1 分

著者： 濱尾章二（Shoji Hamao）
(国立科学博物館 動物研究部 脊椎動物研究グループ 研究主幹)
樋口広芳（Hiroyoshi Higuchi）
(慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任教授)

問合せ先：濱尾章二
〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1
国立科学博物館 動物研究部
TEL: 029-853-8901（代表）、029-853-8317（直通）
E-mail: hamao@kahaku.go.jp

研究成果の概要

三宅島では 1980 年代にイタチが放獣され、現在は普通にみられる。この島で、イタチが持ち込まれる前（1970 年代前半）とイタチが定着した後（2000 年代後半）に、ウグイスの巣の高さを測定し比較した。イタチ移入前には 0.2–1.2m（平均 0.61m）であった巣高は、移入後には 0.5–4.5m（平均 1.79m）となっており、著しく増加していた。この違いは、一般化線形モデルを用いた尤度比検定によって、統計上有意なものであった。

三宅島でイタチが鳥の巣を襲うこと、低い場所の巣ほど捕食されやすいことは、すでに明らかにされており*、ウグイスが高い所に営巣することはイタチの捕食を避ける効果があると考えられる。

なお、巣高の変化は植物の成長によるものとは考えられない。ウグイスが営巣する高さ 3–4m のアズマネザサ群落は、人間活動によって常につくられており、畑周辺などに普通にみられる。

* Hamao, Nishimatsu & Kamito, 2009. Ornithological Science 8: 139-146. (国際基督教大学との共同研究)

図・写真

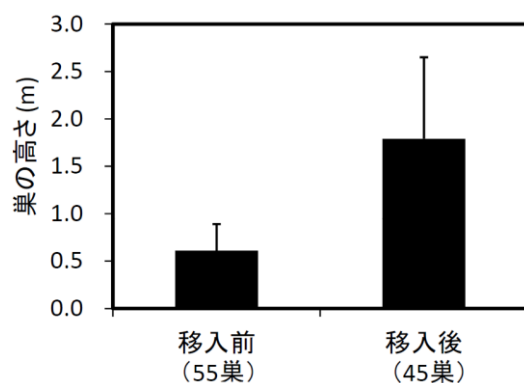


図 三宅島におけるイタチ移入前後のウグイスの巣高の違い。平均値と標準偏差を示す。



写真 イタチ移入後のウグイスの巣 (高さ 2.5m)
<報道用画像の提供についてはご連絡ください。>

研究の背景

日本の多くの島嶼では、ネズミ類やハブを駆除する目的でイタチやマングースが人為的に移入された。一方、島には肉食性哺乳動物が生息しないことが多く、捕食者に適応していない鳥類（特に卵・雛）への捕食が問題となっている。

本研究は、移入した動物が在来鳥類の巣を捕食するだけでなく、鳥類の生態を変化させるという影響も及ぼしていることを明らかにした。高い巣は鳥類の捕食者に襲われやすいことは一般に知られており、事実、高いところにあるウグイスの巣がカラスによると思われる捕食を受けた例も観察された。

動物の人為的移入の前後で巣の高さを比較した例や、巣高の著しい変化を明らかにした例は知られておらず、移入動物の在来生物への影響を知るうえで重要な知見が得られた。

今後は、巣高の変化により托卵*が起きやすくなるか、巣高以外に産卵数などの繁殖生態も変化していないかなどに興味を持たれる。

* ウグイスは、カッコウの仲間のホトトギスに托卵を受ける。